



■ 第1回 SPARC Japan セミナー 2015

「学術情報のあり方-人社系の研究評価を中心に-」

2015年 9月 30日(水) 国立情報学研究所 12F 会議室 参加者:95名

第1回 SPARC Japan セミナーは、人文社会科学分野の研究評価に関する最新の状況や英国の研究評価の状況について話題提供いただき、学術情報流通を支援する様々な取組みをふまえて、人文社会科学分野の研究評価やインフラ整備を含む研究支援に大学および図書館が果たせる役割や可能性について議論しました。

現各登壇者の講演要旨、配布資料等を含め詳細は、SPARC Japan の WEB サイトをご覧ください。

(<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2015/20150930.html>)

講演

評価以前の問題:人文学・社会科学とは何なのか 中尾 央(山口大学国際総合科学部)

人文学とは何かという問題に関して、1)人文系がそもそも多様なもの、2)人文系の評価問題という問題設定も良くない、3)評価は誰がすべきなのかという論点から検討を行った。人文学は独自の使命があり「スローサイエンス」と言われることもあるが、実態は図書だけではなく論文も重要なこともあれば、一律にスローである「べき」でもない。人文学は単一ではなく多様なあり方が可能ではないか。実際に、人文学・社会科学・自然科学という分野思考が当てはまらない事例もあり、境界も曖昧になりつつある。こうした多様化する研究のあり方を評価する基準をどうするかは、各分野に細分化されるものではなく学術全体の評価問題であろう。数で評価できないに関わらず、その評価を研究者側は評価側に任せてしまうのではなく、両者が情報交換などを行いながら多様な評価基準の設定をしていくことが必要だろう。

社会科学の研究評価に求められる多面性: 政治学と環境学の観点から

野村 康(名古屋大学環境学研究科)

政治学分野では、自然科学分野と比較して研究成果が数値に表れにくい傾向がある。本(単著)や紀要に重きを置く文化があり、デジタル化は完全ではない。論文も、一編が長い、共著が少ない、日本語が多いといった特徴があることから、一般に社会科学分野では、成果数や被引用数が少なくなる傾向にあり、分野ごとの発表形態の特性を踏まえた評価が必要だろう。その際に、論文数などの量

的評価に傾斜すれば、業績を出しやすい研究へと偏りが生まれ、学術的発展にマイナスになる可能性がある。社会科学分野では、社会理解と社会的課題の解決へ貢献といった研究のインパクトも重要であり、学問の発展やアウトリーチの貢献を考えた評価も必要である。環境学分野では、既存の大学評価基準(ランキングなど)が活動の障害になっていると言われており、研究の方向性や実際の貢献も評価すべきといった議論がある。アメリカにおいては、STARSといった代替的な評価指標が利用されるようになってきている。社会科学の研究評価は、学問的特性と社会的課題を考慮した多面的なものであることが必要だろう。

「人文系の研究評価はどこを目指すのか？」

永崎 研宣(人文情報学研究所)

人文社会系研究は、研究者数および研究費で見ると、学問分野全体ではわずかでしかない。一方で、科学基本計画など各種政府による文書においては、人文社会系への様々な期待がなされている。人文系の評価における課題には、「世間」と「業界」での評価の問題があるが、前者は即時に定まるとは限らず、後者は研究分野・大学人事・大学ランキングでの評価軸のずれ、これらの社会軸と社会からの要請との対応関係、新しい研究動向への評価軸などの課題を抱えている。これらの課題の出口として、量的および定性的評価に対する工夫が求められる。J-Stage や CiNii Articles などの収録刊行物に対して引用情報を提供することは一つの方策だろう。デジタル人文学分野の学際領域学会ではこうしたことに様々な角度から取り組んでいるので参考にされたい。また、米国の文学・歴史学の既存の学協会ではデジタル成果物についての評価ガイドラインを公開しており、これも参考になるかもしれない。

責任ある研究活動の推進と研究評価

中村 征樹(大阪大学全学教育推進機構)

研究不正や研究倫理教育という観点から、研究評価を検討する。研究不正への対応が進んでおり、文科省のガイドラインでは、大学などの研究機関の責任が着目され、例えば研究倫理教育や研究データの保存・開示の実施など組織的対応が求められるようになってきているが、十分なのか。研究不正には、捏造・改ざん・盗用(FFP)の特定不正行為に加え、二重投稿や不適切なオーサiershipなども含まれるが、米国では研究不正の定義を巡る議論の過程で、連邦規律で研究不正は FFP に限定され、その他の受容されている研究慣行からの深刻な逸脱行為は含まれていない。しかし、FFP 以外の「好ましくない研究行為」に対する対応への問題提起もなされており、さらに責任ある研究活動の促進(RCR)へと議論が移りつつある。FFP 以外の不適切な行為は、頻度の差はあれど幅広く行われているが、RCR を促進する要因である研究環境・報酬システム・教育プロセスの側面からアプローチする必要がある。また、「Research Waste」ではない質の高い研究を促進していくことも同時に考えることが求められる。その際には、質の高い研究を担保する研究システムや研究者の評判を組み込んだ評価システムの構築が論点になるだろう。

英国における研究評価制度と人文系の学術研究

佐藤 郁哉(一橋大学商学研究科)

英国における研究評価事業は 1986 年の Research Selectivity Exercise に始まり、RAE(Research Assessment Exercise)は 1992 年から 2008 年にかけて 4 回実施、2014 年には REF(Research Excellence Framework)が実施された。RAE/REF への参加大学数は多く、2014 年は約 5 万人の研究者分の業績、約 20 万件を審査することになり、審査に膨大なコストを要した。評価が得られなければ、研究資金が得られないので年々競争が激化し、現在では 4 段階評価の最高評価を得なければ意味がないレベルにいたっている。また、評価は、研究大学と教育大学の機能分化をより拡大させているとの批判がある。評価の高い大学は、評価が呼び水となり、外部資金獲得が有利になっている。

RAE/REF に対する好意的な見解としては、1)政府資金の用途に関する説明責任の遂行、2)実績主義にもとづく良質な研究への支援、3)競争原理による効率的な研究活動の促進、などの実現が示されている。一方で、高評価を得るために戦略的な対応が行われていることに対する批判もでている。具体的には、スター研究者の安易なヘッド

ハンティング、評価を得やすいテーマへの研究テーマ偏重、新規性の乏しい論文の量産などである。また、評価に影響しない、教育や学内行政への軽視も批判されている。

社会科学分野では、書籍よりも論文での研究成果のアウトプットが増える傾向にあり、研究者が評価にあわせて書籍よりも論文を優先させている可能性がある。日本にとっての教訓は、1)「選択と集中」が目指す最終的な目的の明確化、2)政策目標(目的)と評価プロセス(手段)のすりあわせ、3)評価の効果と意図せざる結果に関する慎重な検討、4)評価プロセスと評価にもとづく資源配分に関する情報開示、5)「評価についての評価」の実施、がある。

パネルディスカッション

<大学、大学図書館の役割、可能性>

モデレーター:駒井 章治

(奈良先端科学技術大学院大学)

パネリスト:竹内 比呂也(千葉大学)／中尾 央(山口大学)／野村 康(名古屋大学)／永崎 研宣(人文情報学研究所)／中村 征樹(大阪大学)／佐藤 郁哉(一橋大学)

パネルディスカッションでは、評価のあり方、新しい形の評価を支援する仕組みなどについて様々な意見が交わされた。以下に紹介する。



佐藤氏: 何のための評価か、誰のための評価か、を考えることが重要である。定性的なものをどう評価するかを考える必要がある。

竹内氏: そもそも、評価を行うための基盤が問題である。STM 分野は、引用数で競われることが多く、それが研究評価の実態に近似していることを多くの人が理解している。一方で人社系では、引用数が研究評価の実態を反映していない。人社系において、多くの人が納得できる指標を考えると、そもそも学術情報のエコシステムに課題があることに気づく。日本の人社系では、まだ電子ジャーナル化すら進んでおらず、OA 以前の段階である。学術情報のエコシステムの整備が、多様な評価の実現につながると思う。

駒井氏: 日本では、事前に 100%実現可能であることを確認してから何かを実行する傾向があるが、できることから始めてもよいのではないかと。Facebook の「いいね！」や、ソシオメトリック・テストのように好きな論文を挙げてもらおう等、

新しい評価方法もありえる。アウトリーチを評価する方法も考える必要があるだろう。さまざまな評価を可能にするために、プラットフォームが必要であろう。アイデアがあれば、ご意見をいただきたい。

フロア:環境学は様々な側面をもっており、まさに多分野を包含するという意味では学問分野の縮図とも考えられる。環境学の中では、それぞれ異なる特性をもつ各分野をどのように評価しているかを伺いたい。

野村氏:環境学では、各分野の専門家の判断に任せられている。一方で査読誌に投稿するなど、国際的なルールに合わせる取り組みも行っており、その実現のために新たに査読誌を創刊している。

フロア:評価のもとになるデータがなければ、議論は始まらないだろう。当事者が自身の行っていることをリスト化して公開すればよいと思う。評価は評価者が勝手にやるだろう。

-----参加者から-----

😊 何度もポイントを突かれ、とても刺激的なセミナーでした。私には図書館員と研究者ふたつのスイッチがあるようで、今回のセミナーでは後者のスイッチが入りました。発表者のほとんどが研究者で、そのバランスが絶妙でした。研究者の分析が的確で、正と負の側面両方に目配りが行き届いていたことにとっても満足を覚えました。「スローな自然科学もある+評価が定められたおかげで科学が進歩した側面もある」(中尾氏)、「評価基準を定めた途端、評価がゆがむ」(佐藤氏、安達氏)、「評価基準を明示的

-----企画後記-----

😊 大学再編を機に物議をかもした「文系不要」説。同問題を通して文理を問わない学問の在り方が今改めて問われているのではないだろうか。物事には多様な側面があり、多元的に見る必要があることを学者はよく知っている。評価もしかりであろう。このようなものの見方は学者が責任をもって改革し、本質を見極める術を示す必要があるのではないか。

駒井 章治 (奈良先端科学技術大学院大学)

😊 「人文社会科学系の研究評価」は、とても重要ですが難しいテーマなので企画段階では、どこまで有意義なセミナーにできるか心配もありました。しかし、さまざまな切り口でのご講演や、フロアからのご意見を聞くことができ前進するための手がかかりが得られた気がします。すべての分野

フロア:Facebook の「いいね！」機能は、技術的には問題なく関関リポジトリに実装できるだろう。また、かつて CiNii が担っていた引用文献のフォローも関関リポジトリで引き継げるだろう。

フロア:評価者が評価基準を示すと、研究者はそれに合わせて行動してしまうので、気をつけなければいけない。たとえば論文数が基準と示せば、論文を量産するだろうし、本を評価基準とすると本を執筆するだろう。

佐藤氏:何のための評価であるかを明確にしなければ、技術先行で進んでしまうことを危惧している。たとえば university assessment の art 分野では、Exhibition が評価方法となっている。つまり peer による評価が行われている。

駒井氏:この場で答えは出せないが、評価のあり方について考え続けることが必要であり、これからもこういう場を持ちたい。

にしてこなかった人社系にも問題があった」(竹内氏)という視点が特に面白かったです。また、多様性を考慮したいけどそうすると收拾がつかなくなるというジレンマも強く感じました。「分かる」「確かにその通り」と感じた回数から判断するなら、今まででいちばん刺激的な SPARC Japan セミナーだったかもしれません。参加させていただき本当によかったです。

(所属:大学/図書館関係)

の方が納得できる評価指標づくりは難しいですが目的に
応じてできるところから始めてみることに、そして指標ができた後も、形骸化しないように常に評価を評価し続けながら進むことが大切なのだろう、と感じました。

横井 慶子 (東京大学附属図書館)

😊 今年になって各種メディアで炎上し、所属組織でまさに問題になっているため、個人的には関連度の高いテーマでした。容易に解が導き出せる問題ではありませんが、今後も各所で継続して議論がなされ、新しい人文社会科学系のビジョンや在り方を構築していくことが求められるのだろうと思います。今回のセミナーがその一助になれば幸いです。

三根 慎二 (三重大学)